

松下村塾零話

全

八丁
五二



K





杉民治翁見聞
天野御民編述

杉民治

松下村塾零話

山陽堂發兌



一五三六

杉民治翁手翰 (翁ハ松陰先生の實兄)

松下村塾零話御垂示一讀愴然往昔を
追懷仕候能瑣事迄御記憶詳細御記載
被成深く奉感銘候一本寫取置度候へ
共不得其暇候よ付一應完璧仕候頓首

明治三十年九月廿三日

杉 民 治

天野御民様 拙下



松下村塾零話

予は幼時水戸の會澤安翁が及門遺範を讀て其師藤田南谷先生の事蹟を詳述せられたるに深く感したりき頃者偶然此事を思出して松陰先生の松下村塾に於る事ともを記述せんと思ひ立ちしか奈何せん予は先生に從學したるは僅に一年有餘のみ加之予は此時年甫十七八にして何事も意に留めず且先生没後已に殆や四十年見聞したることも多くは遺忘したる左れとも今世人の多く知らざることと思ひ出づ毎に左に記載して天下後世に傳へせ欲す

又以て先生は平素と村塾の模範の一斑を伺ふに足らん豈敢て會翁の及門遺範に倣ふと謂ん哉
序てに記す本篇載する所總て順序次第も唯思ひ出るに隨て之を書き列ねたるものなり且子の文辭に拙きハ固より世人の知悉せらるる所なり今更辨する迄もかし看者幸に之を諒察せられよ

明治三十年松下村塾の晩生

天野 御 民 謹 識

一 村塾は先生の叔父玉木翁(文之進と稱す)生徒を集めて教授せられたる時其堂に扁名したるもはかり翁仕よ就に及て先生の外叔久保翁(五郎右衛門と稱す)邑の子弟を會し素讀筆札を授けられし時復も其塾號を襲用せり先生安政二年十二月獄を免されて家に錮せらるる翌年七月許されて家學(山鹿流の軍學)を門人に教授するを得たり是に於て來り學ぶ者頗る多し九月先生松下村塾記を作る因て其号遂に先生の教場に移轉せり村塾に掲ぐ松下村塾と書したる額は梅田雲濱翁の筆かり

一 先生の學固り朱子學を主とすとも雖も敢て一に偏せず其論語を講ずるに當ても諸注一見の便を以て時としては論語微集覽を以てし或は古注或は仁齋又ハ但徠王陽明の説を交へ之より己の發明説を加へ取捨折衷せらるるを其餘考證を主とせり其發明する所多く之より據れり

一 國朝の學に至ては本居翁の古事傳を主とせらるれども亦一に偏せず水戸學山陽翁の説も探り或は野乘に倣せらるゝことあり

一 西洋の事に至ては清人魏源の海國圖志を初め當時有らゆる譯書は悉く讀まれざるあり

一 先生の書を解釋せらるゝは専ら文法より入る經書の如きも講會の時屢々文法を説かるゝことあり論語學而第二章其為人孝弟の章を以て時の起承轉合を説き示さるゝ如き類多し鹽谷世弘曾て先生の著孫子評註宛見て其文法より解釋を下されしより深く感服したりと云ふ蓋先儒多く意義の解釋を先よして誤謬少かりとされたり

一 先生徹夜讀書せらるゝこともし然れとも經書の講會歴史の會讀等夜に於て爲すときは往々鶏鳴に達することあり

一先生睡眠の時間極めて短かむ故に門人に書を授るに當り晝間と雖も疲勞じて覺えず眠らるゝことあり爾るときは暫時執つ伏して睡し忽ち寤て復た書を授く

一先生は歴史を讀まざるゝには常に地圖に照合し古今の沿革彼我の遠近を詳にす依て地理に精通せり毎ねに曰く地を離れて人なく人を離れて事なし人事を究めんと欲せば先づ地理を見よや

一先生毎に門人に諭して曰く書を讀む者は其精力の半を筆記に費すべしと故に先生は詩文稿の外抄録積て數十冊に及べり其指の筆の當る所固くしる石の如し

諺に云ふタコか出来き居れり猶ほ裁縫を専らよる婦人尺指の所謂豆は出来ぬが如し

一先生門人に作文の勸奨せらるゝも詩作は強て勵まざれず蓋文章を能せされは己の意を達すること能はずと云ゆにあり時は多くは風流に属すればかり曾て曰く詩聖と稱する杜子美の句に穿花蛺蝶深々見點水蜻蜓款々飛と是等の閑言語をいすの暇なしと古人も云ふることありを話されたり

一先生時間を惜み虚禮を貴はず曾て門人岡田耕作正月二日書を授る爲め塾に至る先生特々文を興えて之を

賞せられたり耕作時に年甫めて十歳
 一予は先生に従學する者の中に於て最も記憶力に乏し
 き者あり一日先生より問て曰く先生記憶極めて薄し例
 へは今日讀みたる書も明日は忽ち遺忘す如何して可
 らんや先生曰く夫を乃至能きことあり凡そ讀書ハ
 一時に通曉又は記憶せんと之を望むべからず例へば
 初には十八史略次ぎには綱鑑又其亞きハ通鑑と追ひ
 續返し讀むときは自然意義も解け漸々事實も
 暗記するに至るあり始めより記憶力強き者は却て之
 を待み復習を怠り遂に記憶薄き者よりも劣るに至るも

のあり學問よあれ事業にあれ決して急ぐ可らずと
 一舊長州藩學校の級を四等に分つ(小學校は此外たゞこ
 ら勿論かり)曰く大學生入舍生居寮生舎長是なり或時
 大學生若干名拔擢せられて入舍生に擧ぐる之に加ハ
 るさる者大に不平を抱き教員より迫て之を論んや欲す
 先生之を聞て其二三人を戒め諭して曰く足下等將に
 云々せんとす之れ甚も宜しからず若し教員よりして
 果して不公平あらんか足下等愈々勉強して選り遇ひ
 し者以上に出るとき志すべし然るときは教員焉ん
 と其儘に爲し置んや區々たる等談何事争ふに足らん

且是下等已に學校に入て道を學ふ我身に反省すこと
 ことを求めずして曠々しくも教師に通り議論せんとなす
 るは悖れるの甚しきありと不平の生徒之を聞て大に
 悟る所あり其事を止めり

一先生絶て書畫骨董等の娛樂ある其未だ登次建さる前
 杉の家にて諸生を教授せらるるや壁間常に木原松
 桂老人の書きたる三餘晴書七生滅賊は一幅を掲ぶる
 のみにて他と取り換へられたることかし藝中よりは固
 り書幅の掲る所たにかし

一先生酒を飲まず煙草を喫せず一日門人煙草の無用

よして且書あることを論ず是に於る高杉晋作等大に
 感奮し其坐に於て煙管を折り復も用ひず又深く諸生
 を戒めて圍碁將棋等を禁せられき

一先生最も婦人教育を熱心し常に其良教書を心を憂ふ
 時多先生の外叔父久保翁隱居して詩書筆札を以て邑
 中の子弟を教授す先生乃ち門人富永有隣をして曹大
 家の女誡七篇を譯述せしめ之を倉に致して子女に授
 けしむ

一先生毎日に門人に諭して曰く凡そ學問は一に專にし
 て精通せんことを要す決して雜駁を渉るべからず晋の

杜預か左氏傳に於る宋の司馬光か資治通鑑に於る本
居宜長か古事記に於る皆畢生の心力を之に盡せり故
に此三氏の假令他の書を讀むも皆其目的たる書の爲
めを爲し又他の書述あつても悉く其に餘力を出るのみ
故に其説明確よして卓越あること後人の得て及ぶ所
に非すと又嘗て經史子集皆を武教全書(先師の家學山
鹿流の兵書むり)の註釋むりせ云はれたるも蓋又其意
かり

一先生毎ねに門生に語て曰く吾深く弘法日蓮等の行爲
を偉とす蓋彼等の奉ずる所の佛法を善とするに非ら

ず唯彼等は其信する所の法を弘めんが爲めには奈何
かる艱難をも厭はず又毫も死生を顧す其勇膽剛氣能
く尋常人の企て及ぶ所を非す是を以て能く一宗を開
き永く後人の尊崇する所を爲れり惣て一業を成んや
欲する者ば此勇奮果敢ある可らずや

一先生常に諸生を諭すも毛遂の公等碌々人を依て事を
成すの語を誦し之に加るに韓退之か伯夷頌の獨立獨
行世の毀譽褒貶を顧さざる氣魄ある可らざるを以て
せられたり

一先生曾て予に謂て曰く予は冷泉古風大人の男かり宜

しく國學を修めて乃父の遺志を繼へし然れども今の和學者かゝる者か頑固にして奇怪を説くは吾の取らざる所なり之を矯るにハ吾に従て漢學を爲すよ如かず博く學べ備せざることを學者の本領なれや其公平にして己ら學派を異かる者を忌むること此れ如し

一先生嘗て門人に語て曰く支那の金聖歎の水滸傳を著すや百餘の人を以て組み立たり我邦の馬琴か八犬傳を著すよハ僅か八名を以て編成せり是れ馬琴の力優れる所なりと

一先生爲永春水か著す所のいろは文庫を讀て其評を下

せり惜ひ哉今其原稿を紛失せり予唯其一を記憶せり曰く狂訓之狂何足以爲訓と春水は狂訓亭と稱す是れ其概評と見て可からん先生讀書の該博にして小説と雖も等閑に看過せざること此の如し

一友人馬島春海君予の爲めに語て曰く吾十六七歳の頃龍弥太郎氏と共に村塾を詣り始て先生を見みへ東修を行ふ曰く謹て教授を乞ふ答て曰く教授ハ能はさるも君等共々講究せんといはれり去る先生送て昇降口に至る吾等少年に對して其謙遜をうること此の如し越て二日の夜龍氏と筆を至り通塾を會讀す已にし

て寅鐘午前四時を報す先生曰く今から寐るも無益かり君等は詩を作らば讀ふ韻致分んと時窮陰も属す各巨燧に仰臥して詩を按ず暫して先生韻字本を取り數次忽ちにして長篇を賦す其時を惜み且勉強せらるゝこと此の如しや

一安政の頃僧月性萩城に來り各寺に於て説教を爲し專ら尊王攘夷の大義を講演す先生予輩年少生徒をして行て助聞せしめ以て志氣を鼓舞せしむ

一先生嚴冬の候と雖も襦袢袴羽織の外他を兼用せられたる事おし蓋寒暑に身を馴らし豫め事ある日を慮れ

るかり

一先生諸生に諭して曰く書を讀て已か感ふ所は抄録して置へし今年の抄は明年の愚とかり明年の録は明年の拙を覺へし是智識の上達する微かり且抄録は詩文を作るゝ古事類例比喻を索引するゝ甚ふ便利かりと之ゝ由て門生皆先生に倣ひ讀書の際所感あれハ紙を裂て唾を以て本の上欄に貼附し一冊を讀み了る毎に別冊に抄録するを常と爲せり

一先生門人の稍々日本外史の如きを讀に至れば勉めて無點本を讀しむ因て壁を設て曰く夫れ盲者には勉て

自ら杖を突て獨歩せしむへし常に人に手を引れて行くやさハ終ふ獨歩すること能ハさるに至らん今や無點本を噴む者も初の間は難を覺え噴みを誤ることやも有らん然れとも後日力を得ること甚ふ多しや

一先生母に論すらく人は到底孝孝兩全むること能はずや蓋密に察す所先生東北出遊に一跌し海外航行も再跌し常に父母兄弟に憂苦を被らしめあるに由るに非らざるか然も先生の君國に大忠よして又其名を天下後世に揚げて以て父母を慰すのみならず兄弟親族の名譽をも揚げふるハ實に忠孝兩全かりと謂へし

不傳

一子曾て之を聞く森田節齋翁嘗て曰く吾門下に於て及ハさる者三人あり吉田寅次郎の贈其一かりと

一子又曾て之を聞く先生壯年外出するに當て多く書籍を懐にやり故に背章毎ぬよ左肩に偏す又平素檢紙を以て帯を束ねりよ其邊幅を飾らずして學問に精勵すること慨ね此の如しと

一先生門人に書を授るに當り忠臣孝子身を殺し節に殉じ等の事に至るときは滿眼涙を含み聲を顫し甚きハ熱淚點々書に滴るに至る是を以て門人も亦自ら感動して流涕するに至る又逆臣君を齎ますか如きも至れ

は目眦裂け聲大にゑて怒髮逆立するもの、如し弟子亦自ら之を思むれば情を發す

一先生の國事に尽力せらるゝには天下の同志知己又は門人比各地に遊歴する者と互に風説事情細大を悉く通報し之を飛耳長目と題せる書冊に編纂せり故に身一室を出ずして京坂江戸其他各地の形勢を詳悉し隨て之か畫策を施さる其飛耳長目ハ即ち今の新聞にこそ

一先生の交際極めて廣し敢て異同を撰びず故に單に學者のみならず醫師あり畫家あり武術家あり神官僧侶あり

り農工商に熱心又ハ熟達する者凡そ一藝一能に秀てたる者は皆先生の家に出入せさるハ悉く遠隔の人は常に書信を以て往復せり

一大津郡に烈婦登波といふ者あり千辛萬苦して父及び夫并に夫の弟妹四人の仇を報す蓋登波は百番と稱する者にして往昔積多非人と伍を同す先生其事をも顧ず招て之を家にお致し其節義を賞譽し爲めに其傳を立つ門人其高義を感し各々競て登波を招き或ハ之を襲し或ハ之を物を贈り或ハ之を書を書を求むに至る

一先生前年藩籍を削り祿を沒收せらるる其父杉百合之助

翁の家に錮せらるゝ後ち其門人を教授せしことを許さる。依て其家事を助る爲め米炊白す凡そ扶地方の米炊春と器ハ臺柄を稱し中央に鳥居をいふものあり之を持て體を扶く搗者は鳥居の後方ニ在り助手は前に立つ先生鳥居の上ニ見臺を拵へ門人炊して助手と爲し書を授く予も數々助手を爲して大日本史を授けたり(助手は要せざるもあり先生一人の時と雖も讀書せらるゝは勿論かり)

一杉の邸内に如多し春夏の変先生出て草を除く門人も亦從て之を助く先生草を除きつゝ讀書の方法又は歴

史の談話を爲し門人愉快に勝へず之を樂みとす

一先生の詩文稿抄録等は半紙十行廿字の藍色の豎横罫版を用ふ此板は僧月性の贈る所かり門人も亦之に倣ふ由て先生の所用は固り門人自身のもれも罫版を摺ることハ皆門人之を爲す其當時は罫紙を賣るもの無し今は至る所之あるは學生に幸福と謂へし

一曾て壁は狹隘を感じ新たに一棟を増築す大棟は大工の作に係ると雖も壁は塗り坐板を釘する等のことハ皆門人集りて之を爲せり

一村塾に寄宿する生徒は交番して飯を炊き調理を爲す

薪炭の如きも皆自身市に行て購求以今の書生賄を命
し坐して薪炭を取寄るか如きこやふし

右の外先生バ嘉言善行枚舉に違あらずと雖も多く
は先生バ博及ひ先生の著書中ニ詳かなれば今皆之
を省略と

明治卅年十一月十六日印刷
明治卅年十一月廿二日出版

.....
定額金拾錢
.....

著述人

天野御民

山口縣曹敷郡山口町大字
今道町第二拾一帯地

印刷人

澄川常作

同縣同郡同町大字新町
第三帯地

印刷所

協同印刷株式會社

同縣同郡同町大字道場門
前第六十二帯地

發行所

桂梅吉

同縣同郡同町大字長崎
第三拾八帯地

松下村塾答話正誤

- 一 四 丁の六行 右串の下記の字と誤す
- 一 五 丁の八行 せらあいのる上の誤り
- 一 六 丁の三行 誰の上一の字と誤す
- 一 十八丁の五行 奉承は愚者の誤り
- 一 十九丁 表紙の不整紙の東置の一項は事實之を
うことは付削除す
- 一 廿一丁 先生前年問答と別り處と誤れせられう十
二字を削り誤を免れりて改し
- 一 右十九丁と廿一丁の事柄に甲斐の野木た杉民治露の見
聞を経るも其旨の趣柄を混雜して誤りしものも深く
大方の諸君に應ず

肥後 著 敬白

守

